



A decorative border with floral and vine motifs surrounds the text.

本古典集成

太平記  
四

山下宏明 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第七二回)

太平記 四



定価 二六〇〇円

昭和六十年十二月五日 印刷  
昭和六十年十二月十日 発行

校注者 山下宏明

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一  
東京03(二六六)五一一(業務)  
電話 東京03(二六六)五四一一(編集)  
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎  
組版 シーティエス大日本  
製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Hiroaki Yamashita, Printed in Japan, 1985.

ISBN4-10-620372-3 C0393

目次

凡例 ..... 七

卷第二十三 ..... 一三

大森彦七が事 ..... 一五

直義病悩について上皇御願書の事 ..... 三

土岐頼遠御幸に参り合ひ狼藉を致す事付けたり雲客車より下るる事 ..... 三七

卷第二十四 ..... 四〇

朝儀年中行事の事 ..... 四九

天龍寺建立の事 ..... 五〇

山門の嗾訴によつて公卿僉議の事 ..... 五七

天龍寺供養の事付けたり大仏供養の事 ..... 九

三宅・荻野謀叛の事付けたり壬生地蔵の事 ..... 一〇三

卷第二十五 ..... 一〇九

持明院殿御即位の事付けたり仙洞妖怪の事 ..... 一一

官方の怨霊六本杉に会する事付けたり医師評定の事	一一三
藤井寺合戦の事	一一九
伊勢より宝剣を奉る事付けたり黄梁夢の事	一二三
住吉合戦の事	一四三

卷第二十六

正行吉野へ参る事	一五三
四条繩手合戦の事付けたり上山討死の事	一五八
楠正行最期の事	一七四
吉野炎上の事	一七九
賀名生皇居の事	一八五
執事兄弟奢侈の事	一八六
上杉・畠山高家を讒する事付けたり廉頗・藺相如が事	一九二
妙吉侍者の事付けたり秦の始皇帝の事	二〇五
直冬西国下向の事	二二七

卷第二十七

天下妖怪の事付けたり清水寺炎上の事	三二一
田楽の事付けたり長講見物の事	三三三

雲景未來記の事	三三〇
左兵衛督師直を誅せんと欲する事	二四三
御所囲む事	二四七
右兵衛佐直冬鎮西没落の事	二五五
左馬頭義詮上洛の事	二五七
直義朝臣隱遁の事付けたり玄恵法印末期の事	二五八
上杉・畠山、流罪・死刑の事	二六一
大嘗会の事	二六七

卷第二十八 ..... 二七一

義詮朝臣御政務の事	二七三
太宰少貳、直冬を智としたてまつる事	二七四
三角入道謀叛の事	二七五
直冬朝臣蜂起の事付けたり將軍御進発の事	二八一
錦小路殿南方へ落ちたまふ事	二八四
持明院殿より院宣をなさるる事	二八六
慧源権閥南方合体の事付けたり漢楚合戦の事	二八七

卷第二十九 ..... 二八九

卷第三十

宮方京攻めの事	三二
將軍上洛の事付けたり阿保・秋山河原軍の事	三五
將軍親子御退失の事付けたり井原石宿の事	三三
越後守石見より引つ返す事	三八
光明寺合戦の事付けたり師直怪異の事	三四
小清水合戦の事付けたり瑞夢の事	三四
松岡の城周章の事	三五
師直・師泰出家の事付けたり菓師寺遁世の事	三六
師冬自害の事付けたり諷訪五郎が事	三六
師直以下誅せらるる事付けたり仁義血氣勇者の事	三九
將軍御兄弟和睦の事付けたり天狗勢汰への事	三八
高倉殿京都退去の事付けたり殷の紂王の事	三五
直義追罰の宣旨御使ひの事付けたり鴨の社鳴動の事	三三
薩埵山合戦の事	三五
慧源禪門逝去の事	四〇
吉野殿相公羽林と御和睦の事付けたり住吉の松折るる事	四〇
相公江州落ちの事	四一

持明院殿吉野へ遷幸の事付けたり梶井宮の事 ..... 四一八

卷第三十一 ..... 四二五

新田義兵を起す事 ..... 四二七

武蔵野合戦の事 ..... 四三六

鎌倉合戦の事 ..... 四四五

笛吹峠軍の事 ..... 四四九

八幡合戦の事付けたり官軍夜討の事 ..... 四五八

南帝八幡御退失の事 ..... 四六八

解 説 ..... 四七五

付 録

太平記年表 ..... 四九八

系 図 ..... 五一八

地 図 ..... 五二四





## 凡 例

- 一、第三分冊に続いて、この巻には巻第二十三から巻第三十一までを収めた。底本には、前三冊と同様江戸時代に入り古典刊行の機運が高まる中で刊行された流布本のうち、慶長八年古活字本を用いた。慶長十年古活字本・寛永版本を以って校訂を加え、その部分については頭注にことわった。
- 一、底本は、漢字・片仮名交じりで、時に漢文表記を交えるが、本書では、これを読みやすくするため、およそ次の方針に従って改めた。
  - \* 片仮名を平仮名に改め、漢文表記は読みく니다。ただし、文中に引用される漢詩・偈ゲの類は、作品の効果を考慮して原文の表記を残す。
  - \* 現代国語における仮名書きの基準に従い、感動詞・代名詞・接続詞・副詞・助詞・助動詞などの多くは、仮名書きに改める。
  - \* 仮名づかいは、歴史的仮名づかにより統一する。
  - \* 送り仮名は、原則として新送り仮名の方針に従う。
  - \* 漢字・仮名の表記は、通行の表記による。なお底本には、あて字が見られるほか、「剋」と「刻」、「責」と「攻」、「甲」と「胃」など、同じ語でありながら表記の不統一がしばしば見られるが、つとめて通行の表記に統一する。

\* 読みは、原則として寛永無刊記整版本の振り仮名に従うが、清濁など現代の読みと異なる語、訓読みと音読みの区別を示すべき語、それに人名・地名・年号・官名など、必要に応じて読みを補い、いずれも歴史的仮名づかいによって示す。

\* 音便は、寛永版本に表記のあるものはそれに従い、表記のないものは『平家物語』の語りを参照して適宜判断した。

\* くりかえし符号は、漢字一字をくりかえす場合の「々」を用いるにとどめる。

\* 本文に、適宜、句読点や会話の「」、段落をほどこす。

一、傍注（色刷り）は、本文の読解を助けるため、簡潔に現代語訳を行ったものである。なお、主語や接続詞などは「」で、補足説明は（）でくくって示した。ただし、スペースの都合で、傍注とすべきものを頭注に移した場合もある。

一、頭注では、人名・事項の説明や解釈、本文の校異、傍注の補足、論旨の説明などを行った。また、各章段もしくは段落の内容について、\*印を付して簡単な説明を加えた。なお色刷りで、適宜小見出しをつけた。

一、作品の構成の理解を助けるため、各巻頭に所収年代とその内容を略述した。

一、本巻巻末の解説では、一見煩雑に見えるながら『太平記』を語り進めるのに大きな役割を果たす挿入記事・挿話をとりあげ、その意味（機能）を考えた。なお、付録として、年表、系図、地図を収めた。

一、本書の校注を行うにあたり、古くは『参考太平記』『太平記抄』『太平記考証』など江戸時代の注

釈をはじめ、新しくは佐伯常磨・永積安明・後藤丹治・釜田喜三郎・岡見正雄・高橋貞一・市古貞次・大曾根章介・山崎正和・青木晃・長谷川端・増田欣の諸氏の注釈・テキスト・口語訳・研究から学恩を受けた。一々ことわらないが、ここに記して感謝する。

一、貴重な御蔵書の利用をお許しくださった横山重氏（慶長八年・十年両古活字本）および長谷川端氏（寛永版本）にお礼を申し上げる。なお、本文の作成に、今井正之助・長坂成行・早川厚一の三氏の協力をえたことを申しそえる。



太平記  
四



太平記 卷第二十三



## 卷第二十三の所収年代と内容

◇曆応五年（興国三年〔一三三二〕）の春から秋まで。

◇卷第二十二において、四国・中国方面の南朝方の衰退を語っていた。ところが、伊予の北朝方大森彦七が京に飛脚を送り、楠正成・後醍醐天皇らの怨霊が天下をくつがえそうとする怪異を体験したと報じ来る。それら怨霊のなせるわざか、京都に種々異変があり、足利直義が発病する。光厳院は直義の快癒を石清水八幡宮へ祈願、そのしるしがあつてか直義は忽ち回復する。光厳院が故伏見院供養のため、その旧跡へおもむいた還幸の途中、土岐頼遠の一行に行きあい、かれらの狼藉にあう。事件を聞いた直義は激怒し、頼遠の討伐を土岐一門に命じたので、頼遠は夢窓国師にとりなしを頼む。結果として、一門の所領安堵はかなえられるが、頼遠は処刑される。以後、貴族も武家も、この頼遠事件の顛末に怖れをなして極端に神経質になり、京の人々の笑いをかっただ。